

つれづれなるまゝに 第7号

令和元年7月19日（金）発行



校長 深谷 浩一

佐藤匠， 投守に大活躍！

～先発野口は意地の再登板～



土浦日大との3回戦は、雨のため、2日間順延となり、7月18日（木）午前9時から笠間市民球場で行われました。この試合については、15日付け茨城新聞では、「強打発揮したい中央」という見出しで、「昨夏王者の土浦日大に中央が挑む。持ち味の強打を発揮できるか。土浦日大は初戦を14安打で大勝。下位打線にも力がある。中央も初戦で久保田が本塁打



を放つなど力がある。佐藤匠ら投手陣が粘りたい。」（令和元年7月15日付け茨城新聞6面記事より。）という予想が記載されていましたが、実際はどうだったのでしょうか。

◇ ◇ ◇ ◇ ◇

それでは、試合の流れについて、2回戦同様、本校の攻撃を中心にして、1回から順を追って振り返ってみます。

中央が先攻で試合が始まりました。一回の攻撃は、1番小堀（3年）が三振、2番友部（3年）がピッチャーゴロで2アウト。続く3番久保田（3年）がフォアボールを選んで出塁したものの、4番松井（3年）が三振でスリーアウト。1残塁で一回表を終了しました。その裏、土浦日大の攻撃。中央は先発野口でスタートしましたが、試合開始早々、緊張からか左足のふくらはぎの痙攣（けいれん）で途中降板。急ぎよ、2回戦で好投した佐藤匠（3年）がマウンドへ。突然の登板で準備が整っているかどうか心配されましたが、2アウト満塁の危機を相手打者をセンターフライに打ち取り、零点で危機を脱しました。

二回の攻撃は5番永井（3年）から。永井はセンターフライに倒れたものの、佐藤匠にマウンドを譲った野口（2年）がセンター前ヒットで出塁し、次打者キャプテン小沼（3年）の時にピッチャーのワイルドピッチがあつて、2塁にランナーを進めました。しかし、小沼は三振でツーアウト。続くピッチャー佐藤匠もセカンドゴロに倒れ、この回も得点できませんでした。この回の裏にもランナーを二人出す苦しい展開でしたが、ツーアウトでフルカウント



から相手打者を三振に打ち取り、零点に抑えることができました。



三回の攻撃は、9番大畠（2年）からでしたが、三振に倒れ、1番に返って小堀はセンターフライ、2番友部は三振でスリーアウト。初めての三者凡退を喫してしまいました。しかし、その裏、中央は圧巻の守備をみせてくれました。佐藤匠は土浦日大の先頭打者、3

番石渡を三振にとると、4番丸山をライトフライに討ち取りました。続く5番の本田はサードへの当たりでしたが、これを大畠（2年）がエラーし出塁を許してしまいました。しかし、ここで佐藤匠が踏ん張り、6番ピッチャーの荒井を三振に討ち取ってこの回も無得点に抑えたのです。結局、土浦日大のクリーンアップは、中央の二人のピッチャーからたった1本のヒットも打つことができなかったのです。

四回の攻撃は不運が重なってしまいました。3番久保田がファーストへのライナーでアウト、続く4番松井の三振のあと、5番永井はレフト前に運びツーアウトながらランナーを出しました。ところが、6番野口がバッターボックスに入ると、ヒットで出塁した永井が一塁を飛び出し、刺されてしまったのです。しかし、その裏の守備では、サード強襲のヒットからランナーを二人出すも、打者をレフトフライに討ち取り、四度土浦日大を無得点に抑えたのです。

五回に入り、バッターは再び野口から。この野口がライト前にヒットを放つと、それを小沼がすかさず送りランナーを2塁に進めました。ところが、続く佐藤、大畠がともに三振で、チャンスを生かすことができませんでした。その裏の土浦日大の攻撃も振るわず、3番石渡からは2度目の三振を奪い、4番の丸山はセンターフライに討ち取り、とうとう五回まで1点も与えず、前年の王者土浦日大に対して互角の勝負を展開したのです。

試合が動いたのは、六回裏です。疲れが見えた佐藤匠を土浦日大打線が責め立てました。先頭打者にフォアボール、続く打者に二塁打を浴び、さらにフォアボールで無死満塁のピンチを迎えました。そこで柴沼監督はレフトの守備についていた野口を再びマウンドに送ったのです。ここで野口は期待に応えるべく、積極的に振ってくる打線に対して、緩急を付けたカーブで揺さぶりをかけました。最初の8番打者をライトフライに仕留め、次打者もサードゴロでアウトを取って2アウト。その間に1点は失いましたが、ベストピッチングで最少失点で凌いだのです。しかし、1番に打順が戻ると、佐藤が入ったレフトへの痛烈な2点二塁打を浴び、3点差に。とはいえ、レフト佐藤匠の好返球により4点目を阻止したのは、意地の返球と言えるかも知れません。

7回以降は、エース荒井のピッチングに翻弄されて、中央は攻めの精細を欠き、凡打や三振を重ねてしまいました。それでも、八回には1番小堀がレフト前にヒット、九回には3番久保田がセンター前にヒットを放ち、最後の意地を見せてくれました。

試合全体を振り返ってみると、どこかで連打が出て1点でも得点すれば、試合の流れも変わったかも知れません。その意味では、悔やまれるところもありますが、それにもまして、佐藤匠と野口の投手陣が、土浦日大の強力打線、特に3番、4番、5番のクリーンアップには1本のヒットも許さず、5回まで零点で抑えたことは大金星だったと言えるでしょう。

新聞には、「土浦日大快勝」などという見出しが躍っていますが、土浦日大自身は、監督も選手も決して「快勝」だったなどとは思っていないのではないのでしょうか。それどころか、クリーンアップがまったく打てず、3番にバントを命じた小菅監督にとっては、「不快勝」だったのではないかと想像しています。

中央の選手諸君、「中央野球」を見せてくれて本当に感謝しています。ベスト4に勝ち上がったときの木口監督もきっと喜んでくれていると思います。中央に勝った土浦日大には、是非とも勝ち上がっていただき、三度優勝旗を持ち帰ってもらえれば、中央応援団としてもこんな嬉しいことはありません。（おわり）

